

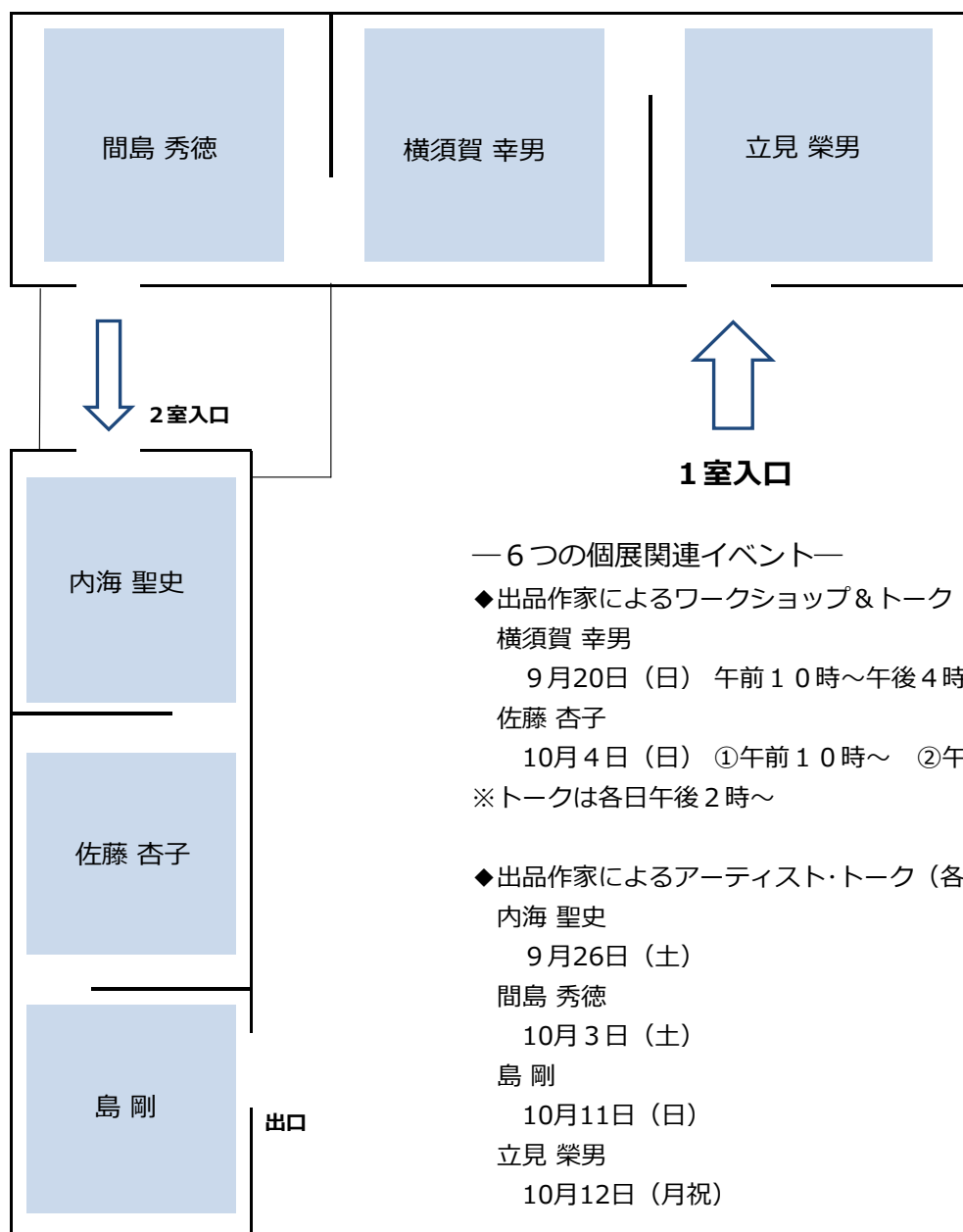
6つの個展 出品作品リスト

立見 榮男／佐藤 杏子／横須賀 幸男／間島 秀徳／島 剛／内海 聖史

HIDEO TATSUMI / KYOKO SATO / YUKIO YOKOSUKA / HIDENORI MAJIMA / TSUYOSHI SHIMA / UCHIUMI SATOSHI

茨城県近代美術館 会期 平成 27 年 9 月 5 日 (土) ~10 月 18 日 (日)

企画展示室 案内



— 6つの個展関連イベント —

◆ 出品作家によるワークショップ&トーク

横須賀 幸男

9月20日(日) 午前10時~午後4時

佐藤 杏子

10月4日(日) ①午前10時~ ②午後3時~

※トークは各日午後2時~

◆ 出品作家によるアーティスト・トーク (各日午後2時~)

内海 聖史

9月26日(土)

間島 秀徳

10月3日(土)

島 剛

10月11日(日)

立見 榮男

10月12日(月祝)

……その他、イベント多数

◇ イベントスタンプラリー「6色の美を求めて」

イベントに参加してスタンプがたまると記念品をプレゼント!
ぜひご参加ください。

立見 榮男 たつみ・ひでお

1940年	東京都に生まれる（47年金沢市に転居）
1959年	金沢市立工業高等学校電気科卒業 日立製作所入社（97年退社）
1963年	画家栗原信、彫刻家松村外次郎に師事
1965年	第19回二紀展初入選 （81年宮本賞、85年文部大臣奨励賞、 88年菊華賞、2002年栗原賞、 06年第60回記念大賞、11年内閣総理大臣賞）
1972年	個展 相馬画廊（水戸、74年、76年、78年、92年）
1982年	第16回現代美術選抜展（文化庁、86年同第20回展）
1988年	現代茨城の美術展（茨城県近代美術館）
1994年	個展 常陽藝文センター（水戸）
1999年	第1回現代茨城作家美術展 （茨城県立県民文化センター、以後毎回） 個展 紀伊國屋画廊（東京、2008年）
2004年	個展 ギャラリー-ESPACE（ひたちなか）
2009年	個展 日本橋三越
2013年	二紀会常務理事

「河童」の随筆集と言えば、火野葦平の「河童曼陀羅」が圧巻です。43篇からなる珠玉の名著です。その後書で、「芋銭子の『河童百図』は私をうならせる。芋銭は河童の存在を信じきっていたと言うから、不思議な迫真力がある。」と書いています。私にとっての河童は、自由な創造上の「野に棲むあるじ」です。ですので少々いい加減ですが、人間より瞑想好きで賢く、神秘の存在です。頭のお皿や背中の甲羅は省略させていただく事が多く、そのためでしょうか、いつしか自画像になってしまう様です。雷神も竜神も、今では家族の一員の様です。元気づけられもしますが、叱られる事もしばしばです。

「6つの個展」では若い作家の方々の、斬新なお仕事との交流を楽しみにしております。

横須賀 幸男 よこすか・ゆきお

1954年	水戸市に生まれる
1976年	第11回茨城県芸術祭美術展覧会（以後3回出品）
1978年	茨城大学教育学部美術専攻科卒業
1985年	個展 コバヤシ画廊 （東京、以後同画廊で個展多数）
1990年	「10月展」（水戸芸術館現代美術ギャラリー）
1993年	個展 ギャラリーサザ（ひたちなか）
2001年	「自然のことば、美術のかたち」（日立市郷土博物館）
2005年	「われらの時代」（水戸芸術館現代美術ギャラリー）
2011年	個展 ギャラリーしえる（水戸、14年）
2014年	第8回現代茨城作家美術展（茨城県近代美術館）

夜のおくの方で

また、ゆうべのおさらいが始まった。

あんまりあたりが静かなので、

蟋蟀こおろぎはとくいそうに

いちだんと声をはりあげる。

～蟋蟀～菅原克己(1911-1988)詩集「手」より

宮城県生まれの詩人菅原克己の詩集を、時々読んでいます。声高な物言いは少なく、その言葉はひそやかで、多くのメタファーによって彩られています。

以前、個展で発表した～答えのない問い～では、その作品とともに描かれていることの意味は言葉で説明できないし、見たままに理解して欲しいという、やや傲慢な考えにとりつかれていたようです。

今回新作を描くにあたり、菅原の詩をツールとして自分の作品を解析し、言葉によって客観視することが描かれたものにとってより深い意味を持ち、その理解につながるのではと考えました。「夜のもうひとつ向こうに静かな世界があって」という菅原の言葉とともに、作品の生まれるところに立ち会いたいと思っています。

出品作品

No.	タイトル	制作年	技法・素材
T-1	緑陰童子	1997	アクリル・綿布
T-2	雷神 野に立つ見ゆ	1998	アクリル・綿布
T-3	野の風	2000	アクリル・綿布
T-4	河童華々	2003	アクリル・綿布
T-5	北国の春・少年時代	2006	アクリル・綿布
T-6	雷神	2006	アクリル・綿布
T-7	竜神雷神逍遙	2008	アクリル・綿布
T-8	雷神 桜が咲いた	2009	アクリル・綿布
T-9	緑陰童子	2009	アクリル・綿布
T-10	河童よそおい	2009	アクリル・綿布
T-11	雷神・檜の風	2011/15	アクリル・綿布
T-12	竜神・雷神あじさいを舞う	2012	アクリル・綿布
T-13	河童緑陰	2014	アクリル・綿布

※T-2、T-4 は当館蔵

※T-3、T-6、T-7 は石川県立美術館蔵

出品作品

No.	タイトル	制作年	技法・素材
Y-1	習作	1982	アクリルガッシュ、 パステル・紙
Y-2	Religion-B	1993	アクリルガッシュ、 サインペン・紙
Y-3	答えのない問い	1997	アクリル絵の具、 木炭・綿キャンバス、麻布
Y-4	Beginning II	2011	アクリル絵の具、 木炭・綿キャンバス
Y-5	ねざめ	2012	アクリル絵の具、 木炭・綿キャンバス
Y-6	雨の森	2014	アクリル絵の具、 木炭・麻キャンバス
Y-7	夜のおくの方で	2015	アクリル絵の具、 木炭・綿混キャンバス
Y-8	この明るさのなかで	2015	アクリル絵の具、 木炭・綿キャンバス
Y-9	ここにいくつかの	2015	顔彩、色鉛筆、 ボールペン・紙

※Y-3 は日立市郷土博物館蔵

間島 秀徳 まじま・ひでのり

1960年	取手市に生まれる
1986年	東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了
1988年	個展 ギャラリーなつか (東京) 以後個展、グループ展等多数
1997年	今日の日本画第14回山種美術館賞展
1999年	VOCA展'99 (上野の森美術館)
2000年	文化庁芸術家在外研修員として フィラデルフィア、ニューヨークに滞在 (~01年)
2002年	第1回東山魁夷記念日経日本画大賞展 (04年第2回、08年第4回、12年第5回)
2007年	「水のかたち展」(茨城県近代美術館)
2012年	第7回現代茨城作家美術展 (茨城県近代美術館)
2013年	「二年後。自然と芸術、そしてレクイエム」 (茨城県近代美術館)
2014年	「作家とアトリ工展」(茨城県近代美術館)

seamount

素潜りをしていると、陸と海が地続きであることが良く分かる。海面を上昇と下降をくり返しながらか漂っていると、見えるものと見えない闇の間で、自身の身体感覚がゆっくりと目を覚ます。

常に制作テーマの核となっている水は、初期段階の顔料とメディウムを繋ぐ素材から、水そのものとしての存在感を強めながら、water works から kinesis へと変化を遂げてきた。

水が流れ変化し続けることは、生と死を育む大地の営みそのものであり、水と共に生きる(創る)ことこそが、未来に繋がる思想となろう。水と身体性との関わりが生み出すことは、kinesis と seamount が融合することによって、海と山が連なる大地の今を再び歩み続けることではなからうか。

出品作品

No.	タイトル	制作年	技法・素材
M-1	Kinesis No.215	2004	麻紙・水、墨、 アクリル、顔料、樹脂膠
M-2	Kinesis No.420 (deluge)	2010	麻紙・水、墨、 アクリル、顔料、樹脂膠
M-3	Kinesis No.452 (bright water)	2011	麻紙・水、墨、 アクリル、顔料、樹脂膠
M-4	Kinesis No.511 (requiem)	2012	麻紙・水、墨、 アクリル、顔料、樹脂膠
M-5	Kinesis No.548 (seamount)	2013	鳥の子紙・水、墨、アクリル
M-6	Kinesis No.607 (seamount)	2014	麻紙・水、墨、 アクリル、顔料、樹脂膠
M-7	Kinesis No.621 (seamount)	2014	麻紙・水、墨、 アクリル、顔料、樹脂膠
M-8	Kinesis No.650 (seamount)	2015	麻紙・水、墨、 アクリル、顔料、樹脂膠

※M-1 は個人蔵

内海 聖史 うちうみ・さとし

1977年	境町に生まれる
2002年	多摩美術大学大学院美術研究科修了
2003年	第6回岡本太郎記念現代芸術大賞展 (川崎市岡本太郎美術館)
2004年	MOTアニュアル2004「私はどこから来たのか ／そしてどこへ行くのか」(東京都現代美術館)
2005年	VOCA2005 (上野の森美術館)
2006年	個展「三千世界」 レントゲンヴェルケ・ヴァイスフェルト (東京)
2007年	個展 shiseido art egg「色彩に入る」 資生堂ギャラリー (東京)
2008年	「屋上庭園」(東京都現代美術館) 「風景ルルル〜わたしのソトガワとのかかわり方〜」 (静岡県立美術館)
2009年	「THE LIBRARY『本』になった美術」 (静岡アートギャラリー) 「自宅から美術館へ 田中恒子コレクション展」 (和歌山県立近代美術館)
2010年	「カイガのカイキ」(足利市立美術館、栃木)
2012年	個展「方円の器」アートフロントギャラリー (東京)
2013年	個展「星の話」ギャラリーエアンドウ (東京)
2015年	個展「moonwalk」六本木ヒルズA/Dギャラリー (東京)

出品作品

No.	タイトル	制作年	技法・素材
U-1	千手	2009-2012	油彩、水彩・綿キャンバス
U-2	星の話	2013	油彩、水彩・キャンバス
U-2	星の話	2013	油彩、水彩・キャンバス
U-3	三千世界 (円環)	2015	油彩、水彩・綿キャンバス
U-4	pace	2015	油彩、水彩・キャンバス
U-5	moonwalk	2015	油彩、水彩・キャンバス
U-6	29の不在と長い壁	2015	油彩、水彩・キャンバス

絵画は「観なければならぬ」という特色を備えている物質です。例えば日用品や廃材等を使用した作品がありますが、それは一見注視されないものを見えるようにすることで、意識や視界の拡張をはかるといった側面があるかと思えます。

それらは、絵画や彫刻作品は「観なければならぬ」という特色が歴史と経験により備わっていることに対して発せられたメッセージかなと解釈できます。

一方、美術館建築は建築の中でも「観るべき」建造物といえます。有名建築家による素晴らしい建築には枚挙にいとまがありません。それら美術館の中にある展示室の多くはホワイトキューブに根ざした造りになっており、作品をより良く見せる為とその存在自体が「見えない」というメッセージを発しています。

私たちは、展覧会を観るという行為の中に、たくさんの「みる」を経験する事になります。

「観なければならぬ」絵画は、美術館という「観るべき」建造物の中にある、「見えない」展示室でどのように立ち居振る舞えるかと考えています。

佐藤 杏子 さとう・きょうこ

1954年	土浦市に生まれる
1978年	第46回日本版画協会展 (以後毎年出品、95年準会員優作賞)
1980年	多摩美術大学大学院修了
1988年	第12回クラコウ国際版画トリエンナーレ (ポーランド、97年、2009年、15年)
1989年	個展 ギャラリー砂翁&トモス (東京、以後同画廊で個展多数)
1992年	第27回茨城県芸術国際美術展覧会 (92年優賞、95年会友賞)
1997年	文化庁芸術家在外研修員としてチェコに滞在(～98年) 国際ミニプリントピエンナーレCLUJ佳作賞 (ルーマニア、99年出品、2001年受賞)
2005年	「未来を担う美術家たち DOMANI・明日展」 (損保ジャパン東郷青児美術館)
2010年	個展「識闘」いわき市立美術館(福島)
2011年	個展 ギャラリーしえる(水戸、14年)
2014年	「作家とアトリエ展」(茨城県近代美術館)

作品を作ることって 何なんだろう？
ワクワクする衝動と勇気じゃないかって 思ったりする。
それは、新しい道具だったり、初めての技法だったりする。
「何者か」に出会うために ひたすら手を動かしてみる。
手から脳に伝える逆回路が増えて
頭は 無意識、リラクスの頂点になる。水の中の私のような。
リラクセスと緊張、そして勇気 そのとき一本の点、線から始まる。
「これ、私の描いた線なのか？」と思ったりもする。
無意識と意識を行ったり来たりする。
そんな過程そのものが、もしかしたら私の心を表現することになる
のかもしれない。

島 剛 しま・つよし

1963年	大阪府大阪市に生まれる(65年熊本県八代市へ転居)
1987年	第18回現代日本美術展 いわき市立美術館賞
1989年	東京藝術大学大学院美術研究科修了(90年博士課程中途退学) 第19回現代日本美術展 大賞
1990年	第1回五島記念文化賞 美術部門新人賞 ニューヨーク滞在(～91年)
1994年	「島剛展一我は“泉”に立つ」佐賀町エキジビット・スペース(東京)
1995年	第2回朝来2001野外彫刻展in多々良木'95 大賞
1996年	茨城大学教育学部講師(2000年助教授、14年教授)
1998年	第7回日本現代陶彫展'98 大賞
2002年	「日本陶芸5人展」シャフォード文化会館(ベルギー)
2003年	個展 村松画廊(東京) 内地研究員として鹿児島県屋久島にて研究活動(～04年)
2006年	「現代陶芸の粋」(茨城県陶芸美術館)
2008年	「風と土の芸術祭」(福島、13年)
2009年	世界現代陶磁展(韓国)
2013年	「島剛の陶—生命と自然のあいだに一屋久島体験前と後」 アカデミア・プラトニカ(那珂)

窯が高温域に達すると、モノの輪郭が薄れ浮遊感の漂うあの世的な異次元空間が出現する。私の制作は、ある時からそこで巻き起こる成り行きを眺め観ることに本意が移った。

窯内に盛られたガラスは流動性・粘性という特性を顕わにして、自らの重みのままに沈み込んでいく。つまり、引力に引っ張られて本体である大地との一体化＝帰還の意思を曝けているのだ。ガラスの能動とでもいべきこのことと、これを受けとめようとする大地との関係をして「動的

出品作品

No.	タイトル	制作年	技法・素材
SK-1	版画集『心音』2005	2015	ドライポイント、 カーボラダム・紙 (ドローイング：ペン・紙)
SK-2	2006-no. 8	2006	ドライポイント・紙
SK-3	2007-no. 3	2007	ドライポイント・紙
SK-4	2008-no. 5	2008	ドライポイント・紙
SK-5	2008-no.14	2008	ドライポイント・紙
SK-6	2008-no.19	2008	ドライポイント・紙
SK-7	2008-no.21	2008	ドライポイント、 カーボラダム・紙
SK-8	識闘DRP201006	2010	ドローイング、 スクラッチ・パネル
SK-9	版画集『心音』2011	2011	ドライポイント、 カーボラダム、ビュラン・紙
SK-10	DP110621	2011	ドライポイント・紙
SK-11	DP120711	2012	ドライポイント・紙
SK-12	DP120712	2012	ドライポイント・紙
SK-13	DP130805	2013	ドライポイント、 カーボラダム・紙
SK-14	DP140704	2014	ビュラン、 ドライポイント・紙
SK-15	版画集『心音』2015	2015	ドライポイント、 カーボラダム、ビュラン・紙
SK-16	OP150603	2015	油彩・キャンバス
SK-17	OP150604	2015	油彩・キャンバス
SK-18	OP150605	2015	油彩・キャンバス
SK-19	識闘DRP20150701	2015	水彩鉛筆、 インク・パネル(墨下地、水性ペンキ)

出品作品

No.	タイトル	制作年	技法・素材
ST-1	静なる平衡	2002-2015	鉛筆、コンテ・紙
ST-2	浮上する永遠	2007	鉛筆・紙
ST-3	生命の総体の器	2012	鉛筆・紙
ST-4	0 point-4	2012	陶磁・アクリル(台座)
ST-5	0 point-5	2012	陶磁・アクリル(台座)
ST-6	元型の海—満, 1	2014	色硝子
ST-7	元型の海—紺碧	2014	色硝子
ST-8	黒泥	2015	色硝子
ST-9	泥雲	2015	色硝子
ST-10	白泥の宙	2015	色硝子
ST-11	宙がひらかれるとき	2015	色硝子
ST-12	宙の暦	2015	色硝子

平衡」状態とは言えまいか。私は常に、大地＝地球が新陳代謝を繰り返す生命体であることを制作の中で実感している。

常温に置かれたガラスは一時的な姿に留まっている一結晶化が不完全であるため、固体状態を呈さないとされるこの素材を、私は格別に面白がっている。要するに、熱源スイッチをオフにするという決断によって、私は刹那にも動き続けるガラスにストップモーションを仕掛け、窯から引きずり下ろし、我がモノにせんとしている。